

廣瀬文庫とチョーサーをめぐる本たち

和田葉子

本日は寒い中、この講演会にお越しいただき有難うございます。

図書館長そして学長も務められた廣瀬捨三先生の蔵書が、「廣瀬文庫」として、関西大学図書館に寄贈されたのは、2003年のことでした。その数はたいへんなもので、搬送用の箱で972箱あったといえます。

廣瀬先生の本好きは昔からよく知られていました。本の数が多いに多く、その重みでご自宅の床がぬけたと聞いたことがあります。私と同じか、あるいは、その上の世代で、本に興味のある方なら誰もが通った、天牛古書店の店員さんが、廣瀬先生のお宅を訪問した時、「先生は本の間から出てきやはった」と話していたと、廣瀬先生の後輩で、後に同僚となられた廣岡英雄先生が語っておられます。廣瀬先生は猫もお好きで何十匹とお飼いになっておられたと聞いております—多いときは47匹だったとか。ですから、床がぬけた時には、猫たちもさぞびっくりしたことだと想像しています。

私が廣瀬先生に初めて教えていただいたのは、関西大学の院生の時でした。私が学部生だった頃は、廣瀬先生は学長をなさっておられたこともあり、教えていただく機会がありませんでしたが、大学院では私の指導教授でした。丁度、学園紛争が終わりかけていた頃でありました。授業は2限目、学生は私だけで、1対1だったことをよく覚えています。テキストはもちろん、チョーサーの作品で、その年度は『カンタベリー物語』の「騎士の物語」を読みました。ラテン語・ギリシャ語に精通しておられ、古典に詳しい廣瀬先生から、チョーサーの作品が中世ヨーロッパ大陸の文学や当時の知識に大いに裏打ちされていることを学びました。今でも、その頃を振り返ると、大学院の講義室に響く廣瀬先生の穏やかな大阪弁が聞こえてきます。ちなみに、今回、展示のために、廣瀬先生の年譜を作りましたら、何と、東京でお生まれになっていたことを初めて知って驚いた次第です。

今度の秋季特別展では、廣瀬先生のご専門であったイギリスの大詩人、英詩の父と呼ばれている、ジェフリー・チョーサー（1340頃-1400）に関わる蔵書を、廣瀬文庫を中心に紹介しています。

廣瀬先生の蔵書といえば、平成5年に新聞紙上をにぎわした『萬葉集（廣瀬本）』が有名ですが、廣瀬文庫には、和書や漢籍の他に、洋書の貴重書だけでも577点、814冊が集められています。先生のコレクションに含まれる、これら西洋の貴重書をざっと眺めてみますと、廣瀬先生のご専門のチョーサーはもちろんであります。ダンテとミルトンに特にご興味があったことがうかがわれます。この他、ラングランド、ガワー、マロリー、聖書、ホメロス、オヴィディウス、ヴァージル、ペトルルカ、ボッカチオ、ギョーム・ド・ロリス（『薔薇物語』）、ミケランジェロ、シェイクスピア、スペンサー、ポーブ、ジョンソン、ラム、ブラウニング、『ゲスタ・ロマノールム』、フレイザー（『金枝篇』）、ギボン、テニソン、ブレイク、ディケンズ、ワーズワースなどの作品が収められ、廣瀬先生の幅広い知識を示しています。

しかし、廣瀬文庫に収められている、どの西洋の本も、結局のところ、廣瀬先生のチョーサー研究に関連するコレクションとなっています。つまり、今回の展示のタイトルの通り、チョーサーとチョーサー



講演中の和田先生

ーをめぐる本たちが集められています。

では、廣瀬先生が愛されたチョーサーとはどのような人だったのでしょうか。生涯を簡単に紹介しましょう。

ジェフリー・チョーサーは1340年頃、ロンドンの裕福なワイン卸業者の家に生まれました。日本では室町時代に入ったばかりの頃です。父親が商売のため宮廷に出入りしていた関係で、ウェストミンスターの宮廷に奉公に入り、やがて廷臣となります。チョーサーはエドワード3世の軍に従ってフランス遠征に出かけますが、フランスで捕虜になってしまいます。しかし、エドワード3世が身代金を払ってくれたので、解放されたことが知られています。帰国して、王妃の侍女フィリパと結婚。ちなみに、フィリパの姉妹、キャサリンは当時、国王の次男ジョン・オブ・ゴントの愛人でありましたが、後に正式に結婚することになります。つまり、チョーサーと王子はやがて義理の兄弟となる訳です。また、チョーサーは外交の用務のため、スペイン、フランス、イタリアなどに旅をしました。イタリアへはアルプスを越えて、二度訪れたことが知られています。飛行機で行ける現在とは違い、旅はさぞかし、たいへんであったことでしょう。「トラベル」の語源が「トラブル」に由来するのも、うなづけます。ちなみに、チョーサーが追いはぎに遭って国王のお金を強奪された、という事件の記録も残っています。

やがて、ロンドン港の税関長となり、主に革製品や羊毛の検査にあたりました。その後、ケント州で治安判事に任命されましたが、まもなくケント州議員となりウェストミンスターの議会にも出席します。その後も、さまざまな部門の事務官に任命され、テムズ川の堤防工事官、林野官、ウィンザー城の修理官、馬上競技設営工事官などを務めました。しかし、晩年は貧しく、何とかウェストミンスターに家を借りましたが、翌年に亡くなっています。1400年のことでした。チョーサーのお墓は現在、ウェストミンスター寺院の一角にあるPoets' Cornerにあります。そこには、偉大な詩人がたくさん埋葬されており、例えば、ディケンズ、ドライデン、スペンサー、ハーディ、テニソンなどもここに眠っています。

このように、チョーサーは、はるか昔の中世に生きていたにもかかわらず、その経歴をかなり詳しく知ることができます。不思議だと思われる方がいらっしゃるかもしれません。ずっと後に生まれたシェイクスピア（1564-1616）よりも、チョーサーの生

涯の方がもっとよく知られているのです。それは、彼が、宮廷に仕えていた役人であったため、より多くの記録が残されているからです。彼が詩作のみを職業にしていたなら、どんなに優れた詩を書き残していても、その人生について、ここまで詳しいことはわからなかったでしょう。

チョーサーについては、身体に関することまで記録されています。1889年、英国の詩人、ロバート・ブラウニングがウェストミンスター寺院に埋められた時、場所の整理のために、チョーサーの埋葬地を移動しました。その折に、チョーサーの骨が掘り出され、検視官によって、身長が5フィート6インチつまり、167.6センチだったことが判明しました。中世の時代にすれば、大きい方であったかもしれません。

ロンドンにいらっしゃる機会がありましたら、是非、ウェストミンスター寺院にお立ち寄りになり、チョーサーのお墓まいりをしてください。

（ここでチョーサーと彼の生きた時代を紹介するビデオの一部を観る。ウェストミンスター寺院の中のチョーサーの墓も画面に登場する。）

話を続けましょう。このような経歴の持ち主であったチョーサーは、面白いことに、英詩の父とまで呼ばれながら、詩を書くことは本職ではなかったわけです。先ほど、お話しした通り、宮廷では騎士として、後には税関で役人として勤務します。そして、治安判事から議員となり、その後、さまざまな事務官に任命されました。チョーサー本人が『名声の館』の中で、税関長をしていた頃は、仕事からまっすぐに家に帰ると、隠遁者さながら、石の如く押し黙って本を読み、読書が過ぎて、ついには目がかすんでしまうような毎日を送っていたと述べています。私は、お宅にお邪魔をしたことはありませんが、本に埋もれて書き物をしたり読書するチョーサーの姿が廣瀬先生と重なるように思われます。

さて、チョーサーの生きた1340年から1400年という時代は、激動の時代でありました。その間にエドワード3世（1327-77）、リチャード2世（1377-99）、ヘンリー4世（1399-1413）というように国王が3度も替わりました。宮廷人として3人の国王に仕え続けるのは、きっと苦労が多かったことでしょう。かなりのしたたかさも必要であったでしょう。また、フランスとの百年戦争はチョーサーの生まれる3年

ほど前に始まっていました。さらに黒死病がイギリスを襲い、人口の3分の1が亡くなるという事態にもなりました。1381年にはワット・タイラーが率いる農民一揆が起こります。教会は腐敗し、オックスフォードではウィクリフが起こした宗教改革運動が大きく広がり、大衆にまで浸透するかの勢いでした。このような状況の中で、ロンドンは大陸との貿易によって商業都市として栄え、そこにブルジョア階級が生まれ、封建制度を揺るがしたのです。このような時代と社会の中で生きたチョーサーは、様々な人間模様を目の当たりにしたことでしょう。そして、そこから人間味あふれる作品が生み出されたのです。

では、廣瀬文庫にも収められているチョーサーの作品に影響を与えた文学者や作品を概観することにしましょう。

当時、富裕な市民階級の人々の中には自分の子供たちにより教育を受けさせ、後に宮廷に送り、出世させようとする者がたくさんいました。チョーサーの父親もワイン問屋を営んでいたお金持ちでしたから、子供の将来を思って、息子をそのような道に進ませたと思われます。その頃、学校では子供たちにラテン語や修辞法が教えられ、ローマの詩人オヴィディウス（紀元前43年生まれ）の作品がテキストの1つとして使われていたことが知られています。この詩人もチョーサーの詩作に影響を与えています。ジョン・オブ・ゴントの最初の妻、ブランシュが亡くなったときに、彼女に捧げる作品『公爵夫人の書』を書きますが、これにはオヴィディウスの強い影響が見られます。

宮廷ではフランスの風習や騎士が女性に仕える宮廷愛をテーマにした文芸が流行しており、チョーサーも宮廷で当然身につけるべき教養としてフランス語とフランス文学に通じていました。この『公爵夫



秋季特別展会場（総合図書館展示室）

人の書』はまた、フランスの詩人たちマシヨール、デシャン、フロワサールなどの影響も受けています。チョーサーは、この頃、フランス語で書かれた『薔薇物語』を英訳し始めています。

チョーサーが宮廷の外交用務のためイタリアに出かけた時、ヨーロッパ大陸ではまさに、ルネサンスが花開いていました。桂冠詩人で人文主義者のペトルルカ、そして『デカメロン』で知られるボッカチオが活躍していました。そしてボッカチオは『神曲』を書いたダンテについて講義していました。この新しい空気に触れたチョーサーは大きな刺激を受けたと思われます。ボッカチオの影響はたいへん大きく、彼の『テーセウス一族の物語』からチョーサーの「騎士の物語」が生まれ、『恋の虜』が意識された結果、チョーサーの『トロイラスとクリセイデ』が出来ました。

チョーサーの『名声の館』には彼が宮廷で愛読したというウエルギリウスの『アイネーイス』、そして、ダンテの『神曲』の影響が見られます。これらはいずれも廣瀬文庫に収められていますが、ちなみに、展覧目録5番の『神曲』は、廣瀬先生には特に思い出深い本だと思われます。というのは、それは、先生が、上司だった村上喜貞予科長から結婚祝いとして、ネクタイと一緒にもらった大切な贈り物だったからです。昭和18年5月28日、現在はなくなってしまった甲子園ホテルで挙式、披露宴をした時のことだったそうです。

チョーサーの死後もなお、彼の作品は多くの人々に愛され続け、たくさんの文人が賛辞を残しています。先ほど話にも出ました、チョーサーと同時代のフランスの宮廷詩人デシャン（1340頃-1410）は、通常、イギリス人と見れば、誰でも手厳しく批判する人でしたが、彼を「偉大なるオヴィディウス」と呼び、絶賛しました。同時代のイギリスの詩人、ジョン・ガワー（1340頃-1408）も彼を褒め称えています。チョーサーは、当時からすでによく知られ人気があったことがわかります。『羊飼の暦』で知られる16世紀の詩人エドモンド・スペンサーはチョーサーを「汚れのない英語の泉」になぞらえました。詩人で批評家のジョン・ドライデン（1613-1700）はチョーサーの詩の多くを訳しました。彼は、ローマ時代の言葉の黄金時代はオヴィディウスに終わり、チョーサーから英語の言葉の清らかさが始まる、と述べています。ドライデンこそ、チョーサーを「英詩の父」と呼んだ名づけの親でした。英国の海軍大

臣、サミュエル・ピープス（1633-1703）は、時には暗号を用いてつづった赤裸々な内容が含まれる日記で有名ですが、この日記に、チャージャーは実にすばらしい詩人だと書いています。彼は貴重本のコレクターでもあり、今回の展覧目録25番のトマス・スペイト編『チャージャー作品集』を持っていました。風刺詩人のアレグザンダー・ポープ（1688-1744）は、生涯、チャージャーを愛してやみませんでした。彼は『名声の館』を現代語に訳したり、チャージャーの言い回しをちょっと下品にまねしたりして楽しんだことが知られています。詩人のS. T. コウルリッジ（1772-1834）もチャージャーの大ファンで、たいへんわかり易く面白い作家だと記しています。詩人のワーズワース（1770-1850）はチャージャーがスペンサー、シェイクスピア、ミルトンと並ぶ文豪であると賛辞を送っています。ワーズワースは『序曲』の中で、チャージャーの語る好色な物語を聴きながら、自らチャージャーと一緒に笑っている場面を描写しています。詩人で彫版画家のウィリアム・ブレイク（1757-1827）は、カンタベリーへの巡礼を描いた彫版画を作っています。彼は個展の目録の中で、この絵の解説とともに、『カンタベリー物語』の登場人物がいかにかうまく生き生きと表現されているのかを述べています。

しかし、すべての人がチャージャーを賞賛している訳ではありません。辞書で有名なサミュエル・ジョンソン（1709-1784）はチャージャーをシェイクスピアと同格の作家としながらも、毒舌家の彼は、チャージャーは英語が古くて読みにくい、中世という粗野な時代に生きていたからだとして述べています。また、『ロビンソン・クルソー』でよく知られているダニエル・デフォー（1661?-1731）は上品な人々が読むにふさわしくない、と言っています。

会場の皆さんはチャージャーの作品を、どう評価されるでしょうか。まずは、やはり『カンタベリー物語』をお勧めします。いくつか日本語訳が出ていますが、岩波文庫のものが入手しやすいかと思われます。上中下3巻ですが、たくさんの物語からなっていますので、気楽にお読みになれると思います。

この物語は、ロンドンの陣羽織屋という名前のパブ兼宿屋に偶然、居合わせた人々が、一行となって、その宿屋の主人に導かれ、新緑の4月、カンタベリーの聖者、トマス・ア・ベケットの墓にお参りする巡礼に馬で出かけるところから始まっています。ちなみに、今でもパブの2階に宿泊できるようになっ

ているB&B（ベッド・アンド・ブレイクファスト）はよくあって、そういう所は、まさにカンタベリー物語の時代と同じくパブ兼宿屋です。もちろん、今では厩はなくなり、駐車場になっていますが。

そんな宿屋に集まった人々は、当時の英国社会の縮図になっています。騎士、尼僧院長、修道僧、托鉢僧、貿易商人、オックスフォードの学生、地主、料理人、船乗り、農夫、牧師、粉屋、免罪符売り、などなど、皆、それぞれに性格が異なっていて、真面目な人から一癖も二癖もある人まで、さまざまな人物が登場します。例えば、騎士は非の打ち所のない立派な好青年ですが、尼僧院長は尼の身でありながら、宮廷風の作法を身につけたセクシーでグラマーな美女として描かれています。学生は、哲学書を20冊枕元において寝るほどの本好きですが、世渡りが下手で、貧乏です。托鉢僧は好色で、町のあちこちで、たくさんの女性との交流を楽しんでいます。誰でも、一度会ったら決して忘れられないような派手で勝気な主婦もいます。彼女は12歳のときから結婚を5回しています。片方の耳が聞こえないのですが、それは夫婦喧嘩をしたとき、夫に耳を思い切りぶたれたからでした。怪しげな医者や、たくましく、あくの強い粉屋など、こういった面々が、宿屋からカンタベリーへの行きと帰りに2つずつ話をして、宿屋の主人の独断と偏見により、一番面白い話をした者には、宿屋に戻ったときに夕食をご馳走しようという設定です。旅行代もすべてこの主人もちです。落語の長屋の花見のような雰囲気の話もたくさん飛び出します。実際のカンタベリーへの巡礼も、昔の日本のお伊勢参りのようなもので、旅行の楽しみの要素も多かったかもしれません。

ここでボッカチオの『デカメロン』を思い出される方がいらっしゃるかもしれません。この作品も女7人男3人の10人が全員、毎日1人1話ずつ10日間、すなわち全部で100の物語を語るという形式をとっています。『カンタベリー物語』と違って、春の巡礼という楽しい旅行気分のものではなく、舞台はもう少し深刻です。フィレンツェの町に疫病が流行し、人々が次々と亡くなってゆく中で、つらさを忘れるため、物語を語り合い、気晴らしをしようという設定になっています。このようにいくつもの説話を集めるという形式は昔からあり、チャージャーが直接ボッカチオをまねて『カンタベリー物語』の構想を思いついたのではなさそうですが、もし、中世イタリア文学にもご興味がおありでしたら、岩波文庫から

全6冊の翻訳が出ています。

(ここで再び、チョーサーと時代背景についてのビデオを一部鑑賞する。)

チョーサーの作品が彼の死後も長く、愛されてきたことは、また、現在まで途切れることなく、作品集が出版されていることからよくわかります。イギリスに印刷術をもたらしたキャクストンが1476年、最初に手がけた英語の大型本は『カンタベリー物語』でした。このように、15世紀から20世紀まで、チョーサーの作品集は編纂され続けました。廣瀬文庫にはこれらの中の重要ないくつかのものが収められています。現在、チョーサーのテキストを引用する場合、いつも決まって使用されるエディションはラリー・ベンソンの『リバーサイド・チョーサー』ですが、これは1933年のロビンソン版が大幅に改訂されたものです。『リバーサイド・チョーサー』は1987年に出ていますから、今年でもう20年目を迎えることになります。きっと21世紀にも、全作品集が新たに編纂されることでしょう。ちなみにキャクストンが15世紀に印刷した『カンタベリー物語』は、今回、展示していますように、CD-ROMとして出版されているので、キャクストンの印刷本のページが、そのままコンピュータの画面上で読めます。来月、東京で日本中世英語英文学会の全国大会が開催されます。そこで、このデジタル画像を解析することによって、15世紀当時、初版が作られた印刷工房でどのようにして作業が行われていたのかを、科学的に検証する発表が行われます。私たち、中世研究者はその結果をととても楽しみにしています。

テレビのハイビジョンやデジタル化されたコンピュータの画像も非常に美しいですが、もっと心引

かれるものが、廣瀬文庫の中に見つかりました。廣瀬先生直筆の自画像です。これを見た時には手書きにしかない暖かさを感じました。まだご覧になっておられない方は、是非、帰りに展示のウィンドウをのぞいてください。

今回の展示では、総合図書館の浅井さん、松井さん、赤木さんはじめ、多くの方々にたいへんお世話になりましたことを、心より感謝いたします。会場の皆様、ご静聴、誠にありがとうございました。

(わだ ようこ 外国語教育研究機構教授)



廣瀬捨三先生自画像

この講演会は、平成19年度秋季特別展「廣瀬文庫とチョーサーをめぐる本たち」にちなみ、記念講演として、平成19年11月29日(木) 図書館ホールにおいて開催したものである。
